
トライアングル

銀河 系一朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアングル

【Nコード】

N8043C

【作者名】

銀河 系一朗

【あらすじ】

準一は、古いラジオから流れる番組で、鈴木老人の語る昭和の始めの話に興味を持った。それは親友水谷と下宿のお嬢さんを巡っての三角関係の恋の話だ。お嬢さんは結局水谷を選び、鈴木は海軍に志願する。戦争が始まった。全4話 - 完結済み。

第1話

高速道路でバイクにまたがり、四輪車の脇をすり抜けながら、アクセルをふかす。

そんな時、自分も鳥のように自由に飛べるような予感が湧き起る。

地面を蹴って、翼をはばたき、空気の抵抗につかまって、ふわりと浮く。後はヒューと風を切って好きな方向に飛んでゆくんだ。家々の屋根が道路で仕切られたカラフルな田畑のように小さくなり、大きなビルの窓に太陽が反射して、こちらをまぶしそうにみつめている。車より速いスピードで走っている電車もゆっくりと這っているようだ。

鳥になりたいって気持ちは誰でも少しはあるんじゃないかな。

どうして、そういうことに憧れるんだろう。

自由？うん、それは自由だな。しかし、俺は自由になったら何をしたいのか？

そう問いかけると、答えはまだ空の彼方だ。

1 第一木曜日

その晩、準一は大学時代からの親友小林伸吾を誘って飲んだ。

居酒屋から始まって、焼き鳥や、おでん屋と渡り歩き、準一のアパートに辿り着いた時は真夜中をまわっていた。「俺、自分とこに帰るよ。」と言い出した伸吾を、サラリーマンになっても大学時代と同じノリで「いいじゃん、泊まってけよ、それとも帰らないと心配するような女がいるのかよ？」と迫る。

準一が冷蔵庫から缶ビールと枝豆を取り出してくると、伸吾はチエスタンスの上にある、かなり時代めいたラジオを触っていた。

「なんだ、これ、古臭いなあ。」

「おう、すごいだろ、ラジオじゃなくて、ラヂオだぜ。」

「何？」

「ラジオは普通シに点々だろ、でもこいつは裏面の表示見たらちに点々で、しかもオヂラって読み方も逆なんだ。」

「へえー。」

たぶん昭和初期ぐらいのものだろう。一見して目立つのは前面上部に半円がみつっ並んでいて、真ん中の半円が左右より高くなっている。サザエさんの頭をイメージしてもらうと似ている。ラヂオの幅は三十センチほどだから、今の技術からしたら無用にでかいラヂオだ。

「これで玉音放送とか聞いたんじゃないかな。」

「ギョクオンて？」

「ほら、太平洋戦争で天皇が国民に敗戦を知らせた放送だよ。」

「あ、あれね。どこから拾ってきたの？」

「駅の北にデイスカウントの店、あんだろ。」

「あ、質屋みたいな、それでいてちよつとした新製品のデイスカウントも並んでる店。」

伸吾はそう言いながら、直径4センチほどのダイヤルをいじっていた。

もつともダイヤルといっても、長い年月で目盛りが消えたのか、はたまた始めから目盛りをつける技術がなかったのか、何も目印がなかった。もうひとつつまみがあるがそれは明らかに空回りしているようだった。

「その店で液晶テレビのラックが目についたんで、入ったら、偶然隅っこに、そのラヂオがあつてさ、古い映画の小道具みたいで面白いなあと思って買ってしまったんだ。」

「でも、ミスマッチだよ、色も、形も、大きさも完全に周囲から浮

いてしまってる感じだよ。」

「いいんだよ、ミスマッチでも。なにしろこのラヂオ、すごいんだぜ。」

準一は、子供が友達に秘密を自慢そうに打ち明けてやる時の気分を思い出していた。

「それな、ちゃんと放送が聴けるんだ。」

「へえー、こんなに古いのに？」

「ああ、ちよつと待ってる。」

準一は茶色いコードから伸びた丸いプラグをコンセントに差し込んだ。

すると、サザエさんの頭部分のスリットの布張りからガガーガーと雑音が流れた。

準一がダイヤルを微調整すると、音質はこもっているが、聞き覚えのあるクラシックの曲が流れた。

「へえー。」

「どうよ？感動した？」

「うん、でも考えてみれば、電波の原理は昔から変わらないんだから、聞こえても当然なんだろうけど……。」

「けど、感動的だろ？」

「うん。」

「じゃあ、感動のしるしに。」

準一は伸吾と缶ビールで乾杯した。

「このラヂオは、別な局は入らないの？」

「うん、ちよつとまわしてみなよ。」

伸吾はのっぺらぼうのダイヤルを少しずつまわしてみたが、時々ピーとかガーとか雑音ができるだけで、まともに聞き取れることはできない。あきらめて元に戻して、クラシックの曲に合わせた。

「どう、最近、バイクで遠出してる？」

伸吾は壁に貼ってあった、準一が撮影した釧路湿原の写真を眺めて聞いた。

「いいや、近場ばかりだな。遠出する暇がないよ。」

「ふふ、社会人してるね。」

ラヂオの曲が切り替わり、時代遅れの仰々しいテーマ音楽が流れた。

「すげえ曲だな、国营放送以外ではありえない。」

「まったく。」

そこでアナウンサーが大上段に構えてタイトルを宣言した。

『わが人生』

準一と伸吾は顔を見合わせて噴き出した。

「わがジンセイだって。」

「よくも恥ずかしげもなく、そんなタイトルつけるねえ。」

準一たちにさんざんにけなされているとも知らず、アナウンサーは型通りの挨拶をよこす。

『今晚は。毎月、聞いてる方が驚くような方をお招きして、その方が送ってこられた興味深い人生について述べていただく、わが人生のお時間です。』

今回は太平洋戦争中、艦上爆撃機に操縦士として乗り込んでおられた鈴木久仁彦さんのお話を四週連続でうかがいます。

鈴木さん、どうぞ、よろしく願います。」

アナウンサーが振ると、やさしわがれた老人の声が答えた。

『はい、よろしく願います。』

声の印象から白髪の薄くなった老人がお辞儀するシーンが思い浮かんだ。

『早速ですが、鈴木久仁彦さんがお生まれになられたのは何年ですか？』

『はい、自分は大正八年に、広島のア渡町という、当時はまだ阿渡村と言っていました、そこで農家の次男として生まれました。』

『子供の頃はどんなお子さんでしたか？』

『自分は成績が良いわけでもなく、また悪くもない、元気だけが取

り柄のありふれた子供でした。』

『その頃はどんな遊びをされてましたか？』

『やはり、日清、日露と戦争に勝ってしまった後ですから、男の子は兵隊ごっこが一番の遊びでして、広島は呉、江田島に海軍がありましたから、海軍ごっこをしてもよさそうなものですが、しかし、どういうわけか、ガキ大将ってやつは陸軍大将になりたがるものでして、当然のように、陸軍ごっこをしたわけです。』

『兵隊ごっこというのは階級なんかもつけるわけですよね。』

『ええ、それが肝心なところです。自分は伍長とか少尉とか、働きに応じてガキ大将に階級を上げられたり、下げられたりするわけです。』

『働きといえますと？』

『いや、たいしたことじゃありませんよ。畑から西瓜や梨をかつぱらつてくるとか、駄菓子屋の婆さんをおびき出すとか、気に入らないやつを落とし穴でひとあわ吹かすとか。』

『ははは、昔の子供は結構、わんぱくだったんですよ。』

『はあ、そうですね。昔は遊び道具なんてあまりありませんでしたが、その代わり今の子供らより遊んでたような気がして、今の子供らは可哀相です。』

『その後、学校はどうされました？』

『昭和十一年、田舎から広島市に出て、広島高校、今で言う大学の文科に進みました。』

『次第に雲行きのおかしくなりだした頃ですね。』

『ええ、しかし、アメリカとの戦争が始まるまでは、のんびりと言いますか、冷静に成行きを見守っていたように思います。』

『では学校生活は普通で？』

『はあ、普通です。今と比べたら男女共学ではないですから、むさくるしい学生時代だったかもしれません。』

『それでも、華やかな青春の思い出はおありでしょう？』

『いやあ。』

『恋の思い出もお話しただく約束ですが。』

『はあ、全部、話すつもりがどうも恥ずかしくていけません。』

当時、私は広島市内の民家に下宿していました、同級生に水谷章という親友がおりまして、彼も広島別の民家に下宿していたのです。その下宿先のお嬢さんというのが、私の恋の相手でした。』

『ほお、親友の下宿先のお嬢さんですか。』

『名前は芙美子と言いまして、女学校に通っており、歳は私たちよりひとつ下でしたが、これがなかなかの別嬪でした。』

最初、下宿を訪ねた時は、そんな美人がいるとは聞いてませんでしたから、水谷相手に大声で教授の陰口を叩いておったのです。』

『はい。』

『そこへ突然、お邪魔しますと涼やかな声がかかりまして、別嬪さんが笑みを浮かべながらお茶を持って入ってきたので、まあ、驚きました。』

肌は博多人形のように白く、鼻は高くないが整って、唇も釣り合って小さく紅が似合うのが、浅葱色の裾をさばいて、藤色の地に菫模様、帯は若草色、胸元に袷紗の萌黄色を覗かせ、いや、あたかも畳に突然、一輪の紫陽花が咲いたようでした。』

伸吾は眠そうにもたれながら、それでも目は閉じずにラヂオに向いていた。準一も缶ビールを持ったまま老人の過ぎ去りし恋の話の行方に耳を傾けていた。

『自分は決まりが悪いやら、お嬢さんの顔を盗み見てばーつとするやら。』

そのあげく、うつかりお茶をこぼして、はい、お嬢さんは咄嗟に懷の袷紗を取り出して、拭いてくれました。

水谷はようやく、お嬢さんが近くの女学校に通っているそうだと紹介してくれ、お嬢さんはひとしきり私に水谷と同じ教室なのか、出身はどちらか、などと問いかけて、それではごゆっくりと下がったのでした。

それから水谷と他愛もない話をしましたが、胸の中ではなにやら

ときめくような心地です。』

『はあ、一目惚れですね。』

『その通りです。』

それからというものの、朝、起きては思い出し、昼下がりには面影が不意と浮かび、飯を食べては溜め息を吐き、夜も思い出しては眠りにつけず、みつともなくて傍から見られるもんじゃなかったと思います。

なんとか心を通じたいものだと考え、これは二人きりになったら気持ちを打ち明けようと考えました。当然のように自分はお嬢さんに逢いたさで、しょっちゅう水谷の下宿に遊びにゆくようになりました。』

『打ち明けるチャンスはありましたか？』

『ええ、そうするうち、水谷が不在の時がありまして、彼の部屋に通された私は、今日こそ想いを打ち明けようと決心して、お茶はただかと待ちました。』

その間の緊張といったら、まるで胸の内に心臓が三十ぐらいあつて一斉に脈打つために、息ができないような感じでした。

そして、いざお嬢さんがお茶を持って入ってくると、頭の中ではこれを口に出すのだと決めてる言葉が、少しも喉まで降りて来てくれないのです。ただ学校がどうの、天気がああだ、こんな映画を観たとか、せっかく二人きりなのに、三人の時とまるで進歩のない話しかできません。情けない話です。』

『いえいえ、恋というのはそういうものでしょう。それでどうになりました？』

『そんなこんなで半年も過ぎたでしょうか。』

水谷はすこぶる気のいいやつで、誰かが授業を欠席すると頼まれる前からノートを貸したり、金の工面に困ってるやつがいればみんなに少しずつ出してやろうと持ちかけ助けてやつたり、かと思うと女学生を口説いて振られたなどと臆面もなく公表したり、言いにくいです。が猥談も得意でした。

しかし、ことお嬢さんのこととなると、私がさりげなく聞いてもあまり話したがらないのでした。

私より接する機会の多い水谷に対する私の嫉妬からくる印象かもしれないませんが、嫉妬には妄想の部分と、極めて鋭い直感の部分があるのです。その直感の部分で、私は水谷もお嬢さんに惚れているのだと信じた。』

『なるほど。』

『それで、水谷の不在をこそそ待つのではなく、思い切って水谷に自分の気持ちも打ち明けて正々堂々として考えたのです。それは水谷がほんとにいい親友だからでもあります。』

『はい。』

『そこで水谷に（自分は最近、夏目漱石の「こころ」を思い浮かべるのだ）と言いました。あれは下宿の娘に学生二人が恋をして悲しい結末が訪れるという話ですから、水谷もすぐに私の言いたいことを悟ってくれました。』

（うむ、実は俺もそれを考えていたのだ。あれはよくない話だ。）

（俺もあんなのはお断りだ。水谷のようにいいやつを裏切るなどはまっぴらだ）

（じゃあ、二人、同時に芙美子さんの気持ちを確かめてみよう）

（それは名案だ。）

（それで振られた方は潔くあきらめ、なおかつ男同士の友情は絶対変えずに保とうじゃないか）

（うん。そうしよう。それこそ友情というものだ。）

こうして私は水谷としっかりと握手したのでした。』

『それでお嬢さんに聞いたんですね？』

『はい、ある日、少し離れた神社にお嬢さんを散歩に連れ出しました。』

行きの道は水谷が付き添い、帰りの道は自分が付き添い、それぞれに気持ちを告白しました。』

『はあ、珍しい告白の仕方ですね。それでお嬢さんの返事はどうな

りました。」

『肝心の返事は、お二人ともそういう対象と思ってなかったので、時間をかけて考えさせてほしいとのことでした。』

それはもつともな答えだと思いました。ただ、お嬢さんに打ち明けたことで、自分と水谷は気持ちがつきりして、互いに以前より深い友情を感じました。

そしてお嬢さんも前よりうちとけて、三人寄ると賑やかに楽しい時をすごせました。自分らの三角関係に対立はなく、鼎立して安定して平和だったのです。』

『なるほど。時間の方がきてしまいましたので、今週のわが人生はここまでとさせていただきます。鈴木さん、お話、どうもありがとうございました。』

『お粗末さまでした。』

わが人生が終わると、ラヂオはまたクラシックの曲を流し始め、

準一は電源を切った。

「古い話だな。」

「ああ。古い話だ。」

伸吾の返事を聞きながら、準一は伸吾と奈緒美をめぐって今の鈴木老人の話のように三角関係になっているかもしれないと考えた。

大学時代、準一と伸吾はゼミで知り合った奈緒美と絵美と四人で付き合い始めたのだ。そのうち、準一は奈緒美と、伸吾は絵美とペアで付き合い合うようになって、ふた組ともうまくいきそうな感じがした。しかし、絵美は三年の終わりに突然、退学して田舎に帰ってしまった。伸吾との関係は消滅した。

しかし、準一は、元々、伸吾が奈緒美を好きだったのではないかと感じていた。そのため、絵美は伸吾の心をはかりかねて、田舎に引きこもってしまったのではないかという想像も成り立つ。

「じゃあ、俺、帰るよ。」

伸吾はそう言うと、ビールの空き缶をキッチンに置いて、帰り支

度を始めた。

「悪かったな、引き止めて。」

「いや、また呼んでくれよ。」

準一は伸吾を送り出すと、鈴木老人の話を思い返した。

第2話

2 第二木曜日

どういつ風の吹き回しだろう。準一から誘わなければ来ることのない伸吾が、夜11時すぎにやってきた。

「どうしたんだよ？」

「いや、たまたま近くで、演劇見せられてさ、その帰り。」

「お前、演劇なんて興味あった？」

「だから見せられてって、言ったじゃん、職場の同僚が頼み込まれて、チケット買わされたんだ。それに付き合わされた。」

「そう。それはお疲れ様。」

「とりあえず差し入れ。」

準一は、伸吾から受け取った缶ビールとつまみのスナックをテーブルに広げて、しばらく一緒にスポーツニュースを観た。

テレビがCMに入ったところで、不意に伸吾が聞いた

「最近、奈緒美は来た？」

なんかさりげなく聞こうという雰囲気があからさまで少しもさりげなくないなと感じながら、準一は答える。

「ああ、日曜の午後に来たよ。」

準一は、伸吾が奈緒美に惚れているなら、あまり詳しいことは言わない方がいいと思い、それだけ答えた。

「そう。」

伸吾はうなづくと、会社の後輩のやらかした失敗談をひとしきり披露した。

スポーツニュースが終わったところで、準一はラヂオを思い出した。

「そういえば、先週、ラヂオで老人の話聞いたの覚えてる？」

「ああ、鈴木老人ね。」

「今日は二週目だよ。」

準一はラヂオのプラグを入れると、スピーカーから流れる音楽に耳を傾けた。

クラシックの曲が終わると、仰々しい音楽が流れて、アナウンサーが『わが人生』とぶちあげる。

『今週は先週に引き続き、太平洋戦争で艦上爆撃機に搭乗されていた鈴木久仁彦さんのお話を伺います。』

鈴木さん、今週もよろしくお願いいたします。』

『はい、こちらこそ、よろしくお願いいたします。』

『前は、ご友人の下宿先のお嬢さんに、ご友人と鈴木さんとが話し合わせて恋を告白して、お嬢さんから二人に考えさせてくれと答えがあったところまででした。』

『はい、そうして一年、二年と過ぎても、私にも水谷にも進展はなかったのです。』

そうするうちに、国の行く末には暗雲が立ち込めました。

国家総動員法が成立し、東京オリンピックの中止が決定され、アメリカが日米通商航海条約廃棄を打ち出し、もはや日本は戦争の坂を転がり始めたのです。』

『昭和十三年、十四年頃ですね。』

『そうなります。』

私は学校を出たら役人にでもなるつもりでいましたが、水谷は風変わりなやつでして、万民に空の散歩を楽しませる遊覧飛行の会社を興したい。

ついてはお前も一緒に手伝わんか、役人よりずっといい給料になるぞ、と誘うのです。』

『面白い方ですね。それで手伝おうと答えたのですか？』

『いいえ。そりゃあ、遊覧飛行したいは面白かろうと思いましたが、』

あなた、広島市民みんなつかまえて、遊覧飛行しないかと誘ったとして、乗りたいと答えるのは数人の物好きでしょう。私はそんな商売が成り立つのか疑問だったのです。』

『そうですか。それでお嬢さんはどうされてましたか？』

『お嬢さんは、色めいたということはありませんが、物言いや態度に大人びた落ち着きが出て、いよいよ美しく見えました。』

自分は抜け駆けしたい気持ちになりました。

と言いますか、水谷は毎朝、毎晩、お嬢さんとひとつの食卓で食事できるのです。

そのように私より有利な立場を利用して、お嬢さんと親密に交際しているのではないかと疑う心が起こって、嫉妬が起こったのです。そこで自分はお嬢さんと二人きりで話す機会を持とうと計画しました。

お嬢さんは既に女学校を卒業して、家事手伝いに入っていました。お嬢さんの母親は週一度生け花の師範のところへ出かけるのが常でした。

自分はその時を狙って、訪問しました。そしてお嬢さんに向かって切ない胸の内を伝え、そろそろ答えがほしいのだと告げました。』

『ほお、お嬢さんはどう答えましたか？』

『赤くなつて「もう少し待ってください」と。』

それから「母の留守に來ないください」と言われました。

自分は「水谷と比べてお嬢さんと顔を合わす機会が少なくて不利だから、つい訪問したのだ。悪く思わないでほしい。」と弁解しました。

そしてある夕方、水谷り部屋でお嬢さんを交え三人で談笑していた時のこと、ふと水谷が手洗いに立ちました。その間にお嬢さんから「明日の午後四時、あの神社でお返事します」と言われたのです。

『いよいよですね。』

翌日、自分は胸を動悸で震わせながら神社に行きました。

秋の長雨が止まった霞んだ空と、濡れて染まった焦げ茶の大地の境に櫟の樹があり、そのたもとに萌黄色の着物姿がありました。お針子の帰りなのでしょうか、道具箱を抱いてうつむいたお嬢さんに私は手を振って近づきました。

自分の足跡に気付くと、お嬢さんは黙って会釈をよこします。

「やあ、遅くなりました。ちよつと学校で友人が喋りかけてくるものだから、なかなか抜けられなくて……。」

まだこちらが言い終わらぬのに、お嬢さんが声を重ねてきて、

「鈴木さん、ごめんなさい。私は鈴木さんのお気持ちに添えません。お許し下さい。」

さつと頭を深くおろされました。

「……。」

一瞬、息が詰まりましたが、すぐ溜め息を言葉にしました。

「ああ、嫌われましたか、そうですね。」

「そんな、嫌いだなんて、ただ深いご縁が感じられなかっただけで鈴木さんご自身はとも立派な方だということは誰よりも知ってますもの。」

立派過ぎて私なんかには向かないだけなのです。堪忍してください。」

お嬢さんは、みるみる涙を溢れさせ、こぼれるままに自分を見つめるので、こちらはなんとか言葉尻をとらえて食い下がろうという気持ちも萎えて、

「では、水谷のことは気に入ってくれたんでしょうね？もし奴も嫌だと言うのなら、許しませんよ。」

呆然とした大根役者の棒読みのように言うのが精一杯でした。すると、お嬢さんは小さな声で「はい」と答えて、急に染まった顔を隠すように押さえたのです。

自分は悔しさに染まった胸でなんとか息つきながら、その場から走り去ったのでした。」

『そうでしたか。それはお辛いことでしたね。』

『はい。自分は水谷を祝福する一方で、もうそれ以上、高校に残り下宿するのも辛かったので、高校をやめて海軍兵学校に入ることについて決めて、電撃的に実行したのです。』

そして海軍兵学校で航空兵に志願しました。』

『なるほど、いよいよパイロットになるわけですね。』

『しかし、どうして航空兵を志願したのかと聞かれるとうまく説明できませんでした。』

単に空を飛んでみたかったような気がしますし、心の中で遊覧飛行の会社を作ると言っていた水谷に先んじたいという対抗意識があったかもしれません。』

『そうでしたか、それで開戦で戦争に行かれたわけですね？』

『いえ、開戦には少し間に合わず、十七年になってからインド洋に展開する九七式艦上攻撃機の要員として派遣されたのです。』

ところが、そこでとんでもないやつに出会いました。』

『とんでもないやつと言いますと？』

『水谷です。』

あいつときたら、いつのまにか航空隊に入って、零式戦闘機、俗に言うゼロ戦のパイロットになってやがるんです。

私は殴りかからんばかりの勢いでやつの胸ぐらを掴んで問い詰めました。

『貴様、いったい何を考えとるんじゃ。お嬢さんと祝言を挙げておいて、こんな危ないところに来おって』と。

すると水谷は落ち着きはらって、

『うむ、遊覧飛行の会社のためだ。わが社専属パイロットのお前が休みを取ることもあるだろう。』

そういう時のために俺も飛行機の操縦を覚えておこうと思ってな。民間の学校じゃ月謝もかかるが、海軍はタダで教えてくれるというから喜んで入ったんだ。』

『ふざけるな、貴様、今すぐ戻れ！』

『アホこけ、今、戻ったら敵前逃亡で軍法会議だ。』

それより芙美子がお前のことを案じていたぞ。

もし会ったらご武運を祈ってますと伝えてくれと言ってな。」

そして水谷はお嬢さんからの手紙を見せてくれたのです。

そこには確かに、もし、鈴木さんに会ったら、毎日、ご武運をお祈りしておりますと伝えてくれと、流れるような筆使いで書いてありました。

私はそれだけで殺伐と乾ききった心に大きな潤いを得た心地で、水谷を怒る勢いも失せてしまいそうでした。

『ほお、劇的な再会ですねえ。』

『ええ、やつは頭の回転も運動神経も抜群でしたから零式戦闘機の要員に採用されたんでしょうが、それにしても遊覧飛行のためなどという理由で航空士官になどなつてほしくなかった。』

徴兵を逃げまわつてでも、お嬢さんと一緒にいてほしかったです。

『

』しかし、戦争の真っ只中ですよね。』

『はい。インド洋ではポートダーウィン、コロンボと我が部隊は戦果を挙げて、意気揚々でした。』

特に零式戦闘機の性能は敵イギリス軍の戦闘機を上回っており、危なげない勝利だったのです。

我々の次の目標は、ツリンコマリという軍港でした。

私は九七式艦上攻撃機に、水谷は零式戦闘機に乗って攻撃にかかりました。

敵の戦闘機も待ち構えていたのですが、零式にかかると一方的に落とされていきます。

私は地上にある海軍の施設に狙いを定めて、爆弾を投下します。ここで説明しますと、九七式艦上攻撃機は二人乗りでして、前方で私が操縦し、後方で広瀬という爆撃手が爆弾投下か魚雷発射をするのです。

私の機は予定通り施設に爆弾を投下し、帰途についたわけです。

しかし、私らはいつの間にか僚機と離れていました。
そこを手負いの獲物を狙うハイエナのような敵戦闘機に見つかっ
てしまったのです。

「後方七時、敵機！」

広瀬爆撃手が大声で叫ぶやいなや、トンネルの中でライトが延々と続く感じで、オレンジの色が宙にポツポツと現れてきます、これが敵の機関砲の銃弾でして、恐ろしく鮮やかに左主翼から機首をすすめました。

目をまばたきして見ると、風防ガラスにヒビが入っております。さらに左腕がカーツと熱くて、飛行服が裂けて血がどくと流れているじゃありませんか。

「鈴木少尉、大丈夫ですか？」

「おお、かすり傷だ、心配すんな。」

私はマフラーで腕を縛りつつ、ペダルを踏み、操縦桿を倒して、今さっき自分たちを追い越していった敵戦闘機から逃げようとしま
す。

「また、追ってきます、後方四時。」

今度は操縦桿を引いて、スロットル全開。

なんとか上昇して今回もオレンジのポツポツは左後方によけるとができました。

しかし、こっちは爆弾や魚雷を積むための設計で、運動性能は劣っており、小さな機関銃はありましたが使える位置にまでまわりこめないので。

このままでは撃墜されるのも時間の問題かと思われた。

自分はペダルを踏み、操縦桿をくねらせ、スロットルを操り、必死に逃げました。

しかし、敵はいよいよわが機体を照準器に入れ、激鉄に指をけているに違いありません。

「少尉、真後ろ！」

叫んだ広瀬が続けて「おふくろ」と言うのが聞こえ、自分も「おふくろ」と呼びました。

一瞬、目を閉じると、瞼の裏に現れたおふくろはにこやかな笑顔で……、続いて父と兄と妹の笑顔が浮かび、最後になんとお嬢さんの微笑む様子。

ハッと目を開くと銃弾のオレンジがサアッと、しかしこれは自分らの上方を前から後ろに向かう銃弾で、あれつとよく見ると前方から零式戦闘機が猛スピードで敵を退治に向かう様子です。

まもなく敵を撃墜した零式戦闘機は旋回して自分の機に並びかけ、飛行帽の水谷が白い歯を見せて微笑みました。

あつ、と自分は手を合わせた心地、水谷が菩薩に見えました。

自分は「ありがとう」と叫んで、主翼を振りました。

水谷も主翼を振ると、「また、あとでな」と言い、翼をひるがえしてまだ戦闘が続く空へ引き返してゆきました。」

『大変なところでしたね、水谷さんのおかげで助かりましたね？』

『はい。それが自分らは先に母艦に戻って、水谷のやつを思い切り誉めちぎって、礼を百万回も言おうと待ち構えているのに、いつまでたっても水谷の機が帰ってこないのです。

私は隊長を見つけて駆け寄り、敬礼もそこそに、

「中佐、水谷のやつは？」

隊長はうつむいて

「うむ、水谷は今日も三機撃墜と大成果を挙げおった。

しかし、運悪く制御を失って落下してきた敵機と激突してな。

惜しい男を失くしたよ。」

「そ、そんな」

自分はそれでもなくとも失血でふらふらしていたので、その場に卒倒するように膝をつきました。」

『そうでしたか。水谷さんは戦死された。』

『ええ、ほんとに悔しくて、悔しくて、自分は真剣に替わってやりたいと思いました。』

お嬢さんをめぐっては嫉妬したこともありましたが、失ってみると、自分は水谷をかけがえのない親友として愛していたのだと気付きました。

そして水谷に対して、あやまちのことをあやまりたい気持ちでいっぱいでした。』

『もっとお話を聞きたいところですが、本日の時間がきてしまいました。

鈴木さん、続きはまた来週にお願いいたします。』

『はい、お粗末さまでした。』

『それでは本日の「わが人生」はこの辺で、さようなら。』

準一は缶ビールを飲み干しながら言った。

「俺たちは戦争のない世の中でよかったなあ。」

「うん、そうだな。」

「俺、前からゼロ戦でカッコイイと思ってたんだ。バイクとゼロ戦で似てるだろ？」

「そうかな。」

「いや、その動きの自由自在なところが似てるんだよ。

当時、ゼロ戦の旋回性能は群を抜いていたんだ。あんまり追いつけないものだから、アメリカ軍はゼロ戦を追いかけるなど指示を出したらしい。」

「ふうん。詳しいな。」

「子供の頃から好きだったんだ。」

「でも、それで死んだらやだな。」

「そりゃそうだけど。」

「あの、ジュンさ、」

急に伸吾は改まった口調で気を引いた。

「うん、何？」

「今の老人じゃないけど、打ち明けておくと、俺は奈緒美さんが好きなんだ。」

「え？」

そう驚きながらも、想定内だから準一は冷静につけ加えた。

「そうだったのか。」

「ああ、すごく恋してる、愛してるんだ。」

準一は、しかし、奈緒美は俺の女だと頭の中で宣言してみて、それを具体的に説明しようとした。

「でもな、実はな、俺さ」

が、伸吾はそれを遮って言う。

「知っているよ、奈緒美を愛してるんだろう。知ってるんだ。何度も何度も寝てるんだろう、だけど、」

準一は伸吾が泣き出すのではないかと感じた。伸吾は一気に吐き出した。

「だけど、俺も奈緒美と寝ているんだ。何度も、何度も……。」

今度は準一の呼吸が止まりそうだった。

頭の中で、伸吾の言葉がリフレインされて、響いている。

あの奈緒美がこっそり伸吾と寝ていたなんて……。

伸吾は少し口調のテンションを上げて、

「困っちゃうよな、こういうのって。」

でもさ、恋愛するのは、誰にも権利はあって、誰にも悪意はないんだ。

俺はジュンのこと、親友だと思っているけど、そうなんだ。

俺のことも、彼女のことでも許してくれよ。」

「……アア。」

準一がつぶやいたアアは肯定でも否定でもなく、なんと言ったらしいのかという言葉の

最初の母音と最後の母音のアアだ。

「いつから？」

準一は自分が間抜けな亭主みたいだと思いながら聞いた。

「大学三年の終わりかな。」

実は絵美が田舎に帰ったのは、奈緒美の部屋で鍵をかけるの忘れ

てで、全てを目撃されたからなんだ。絵美は俺のこと好いてて、奈緒美のこと一番の相談相手だと思っていたから、シヨックだったんだろう。

でも、これは神に誓って言うけど、俺は絵美を抱いたことも、期待させたことも一度もなかったんだ。俺は他に好きな相手がいると打ち明けていたからね。

ただ絵美もそれが奈緒美だとは思ってなかったんだろう。」

伸吾の話は聞けば聞くほどシヨッキングな話だった。

翌朝、二日酔いの準一はいつ伸吾が帰ったのか覚えてなかった。

第3話

3 第三木曜日

バイクはイグニッションを切っても、しばらくエンジンの冷却ファンのみ回る小さな音がシュンシュンと虫の音のように響いている。

奈緒美はタンデムシートからぴよこんと跳び下りて、ヘルメットを脱いだ。

グレーのパンツに、腰まわりのふんわりした淡いピンクのシャツ、その上に小さめの黒っぽいジャケットをはおっている。

ヘルメットを取った準一は夜気を吸い込むと、使い古されていると感じながら言う。

「ここからの眺めはいいなあ。」

船の灯りと向こうのビルの明かりが連なる、その上を飛行機がストロボライトをまたたいてゆっくりと降りてゆく。

しかし、文明のイルミネーションは星空をスモッグで覆ってしまった分を、人工光で埋め合わせているだけなのではないかと気付いてしまう。

先週、伸吾から告白されて以来、携帯で奈緒美と話しても、以前と同じようには、はしゃがないでいた。伸吾と寝ていながら全く気配も感じさせずに付き合ってきて、一体、自分に対してどういう気持ちでいたのか。それを問い詰めたいのだが、どんな風に切り出したらいいのか、いや、そもそもまだ問いかける勇氣すら湧いてこないのだ。

奈緒美は長い睫毛の下に笑みを浮かべてたずねる。
「どうしたのよ？」

「え、何が？」

「なんか、この数日、元気ないみたいだよ。」

「そんなことないさ。ただ……、」

「ただ？」

「先週の金曜日にさ、ちょっと中央高速を走ったんだけど、その帰りに白バイに捕まっちゃったんだ。交差点の歩道橋の陰から突然、ウーで現れてさ、

お前、わかってるな、速度違反だ、ってサインさせられて。」

「なあんだ、それでか。」

「それでかじゃないよ、少ない給料から罰金取られたら、財布も心も薄く暗くなっちゃうぜ、まったく。」

準一が作り笑いを見せると、奈緒美はうなづいた。

「了解、じゃ、今月は私がために食事に誘ってあげる。とりあえず、明日の朝食は、ジュンのお部屋で作ってあげるわ。」

「おお、嬉しいこと言ってくれるねえ。」

奈緒美が顔を寄せてきたので、準一はいつものようにキスをした。しかし、この唇を伸吾にも吸わせていたのかと思うと、今までとは違うしらじらとした感覚が準一の胸に広がった。

準一の部屋に着いた奈緒美は冷蔵庫からミネラルウォーターを出すと、ふたつのコップにあけて準一にも手渡した。

「ねえ、高校のクラスメイトがまた一人結婚するんだよ。」

「うん、適齢期だもんな。」

「これでクラスの四割はお嫁に行っちゃったことになるかな。あんまり結婚なんて意識してなかったけど、少し焦ってきちゃったな。」
そう言っただけで奈緒美は挑発するように準一の顔を覗き込む。

しかし、今の準一は、奈緒美が伸吾や、もしかしたら他の男にもそんなふう逼迫しているのではないかと考えてしまう。それでいて、そう思うと、なにやら嫉妬心も湧いてきて独占欲をかきたてられる気もする。

「ボーとしちゃって、そんなに罰金がショックだったの？」

「まあね。」

「スピード出して、ふらふら走ってるからよ。」

奈緒美は笑うと、結婚する同級生の相手について批評を述べる。

「背はジュンより少し低いかもしれないな。私が紹介された時は力ジュアルなファッションだったけど、会計事務所に勤めてるんだって。堅そうで結婚相手にはいいのかもね。」

準一は曖昧にうなづいて、時計を確認すると、急いでラヂオの電源を入れた。

ちようど『わが人生』のアナウンサーが挨拶をしているところだ。

『前はインド洋の戦闘で、偶然にも親友の水谷さんと再会、共に戦闘に出撃したというお話でした。』

そして、鈴木さんは危ういところを水谷さんの操るゼロ戦に助けられたのですが、水谷さんは帰還せず、戦死されたのでしたね。』

『はい、まったく悔しい限りです。』

あんないい奴が死ぬより、自分が死んだ方がよかったと思いました。』

奈緒美が準一の耳に割り込んできた。

「何、このお爺さん？」

「うん、インタビュー番組なんだ。毎週、この時間にあるみたいで、今週は三回目なんだよ。」

「そう。」

奈緒美も鈴木老人の話に聞き入った。

『それは言いすぎでしょう。』

『いいえ、前回は言いましたが、自分は水谷にあやまちを犯したことをあやまりたいと思いました。』

『あやまちですか？』

『ここまできたら、正直にお話しします。』

あやまちとは、水谷の細君、いえ、その時の私にはお嬢さんとい

う方がしつくりきます、自分はいよいよ日本を離れる前に、お嬢さんに無理やりな願いをしたのです。

自分は既に生きて帰らぬ決意でいましたが、ただひとつ心残りは自分が唯一本気で恋をしたお嬢さんと一度だけでいいから、想いを遂げておきたいということでした。

振られたお嬢さんと、しかも親友の細君となった人と想いを叶えるなどということが、いかにふざけたことだとはわかっていたのです。

しかし、そうせずにいたら、死んだ後も自分は極楽浄土に落ち着くことなく、ずっと満たされない亡霊となって彷徨ってしまうのではないかと恐れたのです。

また、水谷も、振られた後に私が一度もお嬢さんと結ばれなかったと告白すると、芙美子もまったく嫌いというわけじゃないのだから、お前は一度ぐらい強引に結んでおけばよかったのだ、などと余計なことを吹き込んだのです。

そんなこともあり、万が一、ばれても水谷なら許してくれるだろうと、手前勝手なことまで考えておったのです。

自分は、水谷の新居である借家を訪れました。

「まあ、鈴木さん、お久しぶりです。ずいぶん立派ないでたちですのね。」

柚子色の無地のブラウスに紺色のもんぺをつけたお嬢さんは、純白の第二種軍装という海軍士官の正装をした私をまぶしそうに、懐かしそうに迎えてくれました。

「明日にも日本を発ち、戦地に赴くものですから、その前に挨拶だけでもと寄らせてもらいました。」

「そうでしたか、どうぞ、おあがり下さい。」

自分は重い胸のうちを抱えて居間にあがりました。

「水谷はどこに勤めたのですか？」

この前、葉書の返事が来たのに、それについて何も書いてないの

です。」

「まあ、失礼しました。遊覧飛行の会社の準備をします。口止めされてるので、それ以上は聞かないで下さい。」

お嬢さんは嬉しそうに言いました。今にして思えば、お嬢さんは夫が私と同じ軍服の仲間であることに喜んでいたのかもしれませんが、しかし、私は重い胸のうちを告白しました。

「今日はお嬢さんの顔を見納めに來たのです。」

お嬢さんは私の言葉を笑い飛ばします。

「何を言っんです。水谷と遊覧飛行の会社を起こすんじゃないみせんか。どうぞ変なことは言わないでください。」

「いえ、自分はこの度、出撃したらおそらく生きて帰れないと思います。」

私はそこで音を立てる勢いで、畳に額をすりつけました。

「お嬢さん、自分は生きて帰るつもりはないのです。」

ただ死にゆく者を不憫と思ってくれるなら、一度だけ男の哀れな願いを叶えさせてください。お願いです。」

「鈴木さん、そんなこと言わないでください。」

「お嬢さんは私が恋した唯一の女性です。」

一度だけ男の願いを叶えさせてください。」

畳に額をすりつけると、腰につけている恩賜の短剣が目に入りました。ふと、これで死ぬこともできるのだと思いました。

どれだけの時間が過ぎたかしれません。

お嬢さんはすすり泣くのをこらえて、途切れた声でひとこと。

「鈴木、さん」

自分呼んで、奥の部屋に立ちました。

自分は雲の上を歩くように感じてついていきました。

お嬢さんは愚かな自分に観音菩薩のような慈悲をかけてくれたのでした。

お嬢さんの名誉のために申し上げますが、お嬢さんは決して貞節

を破るような女性ではないのです。戦争という異常な事態だからこそ私を赦してくれたのだと思います。

もう数週間先にはこの身がないかもしれないと思えばこそ、男と女に分かれてこの世に巡り合った生命の悲しみや歓びが、唇を通し、体の熱を通し、溶け合って自分の胸の底に刻まれました。

お嬢さんは涙を流しながら、それでも自分に「死なないで下さい」と声をかけてくれました。

私もうなづきながら、涙をこぼしました。

好いたお嬢さんと交わることが、こんなに切ないことだとは浅はかな私には想像もつかなかったのです……。自分は本当に卑劣で愚かでした。」

準一は、奈緒美が鈴木老人に侮蔑の言葉でも投げかけるのかと思ったが、奈緒美はただ黙って聞いていた。気のせいか目が少し潤んでいるようにも見えた。

『それは大変なことでした。

それで出撃されて、水谷さんが戦死されて、鈴木さんはどうされたのですか？』

『はい、自分の左腕は骨も少し砕けていましたが、なんとか一本につながったので、水谷の遺品を届けに内地に一時帰還することとしました。

岡山の実家と、お嬢さんの実家に参りました。お嬢さんはすでに実家に戻っていたのです。

岡山の実家では、水谷の親御さんと学生時代の思い出話や、水谷に助けられた最期の空中戦の模様など、詳しくしみじみと語りましたが、広島のお嬢さんの家では大変なことが待っておりまして。

お嬢さんのご両親とお嬢さんにひと通りの報告をすると、腕組みをした父上がむつかしい顔で言いました。

「亡き夫の形見を届けていただいた傍から言うのも、気がひけますが、実は鈴木さんにお願ひがあるのです。

身勝手な希望ですから良い返事がいただけるとは思いませんが、

まずは聞いてください。」

「は、どういうことでしょうか？」

自分が問うと、いきなり、父上は頭を下げ、

「鈴木さん、もはや出戻りの古物ですが、うちの娘をもらってくれないませんか？」

いやはや、例の秘め事をお嬢さんが白状したのかと、心臓がカパーと熱くなりましたが、お嬢さんを見やると顔を伏せて貝のだんまり。

「恥知らずな厚かましいお願いとは思いますが、この娘が一度聞くだけ聞いてみてはもらえないかと申すものですから。」

いえ、貴方がこちらへ見えるという電報をいただいてからのこと、この娘が申しますには、水谷様にはぐれたうえは、もはや一生を独り身ですごす覚悟でいるが、ただ、鈴木様は水谷の大の親友である上に、もつたいたなくも私に想いを寄せてくださった器量の大きな奇特な方であられるので、こんなきず者の私でもお役に立てるならば、鈴木様にお仕えしてみたい。

もし鈴木様が要らぬと申されれば独り身と決めているが、一度だけ、恥をしのんで聞いてみてくれなしかと申すのです。」

父上の口調にこちらを責める様子は微塵もないので、自分はいっそう恐縮しました。

「し、しかし、自分は飛行機乗りです。」

当分は内地で教官をするように言われておりますが、いつまた戦地へ出て命を落とすかもしれません。」

「それはこの時局ですから、誰に嫁いでも同じようなものです。」

それよりもやっかいなことがもうひとつありまして。

実は、娘の腹の中に水谷中尉の忘れ形見があるのです。

ならば水谷の実家で産めばよかろうと申しましたが、娘は、水谷はともかく、あの家は自分と合わないのだと嫌がるのです。」

自分はハッと息を詰めました。

「その後、鈴木様から電報が届くと、鈴木様に聞いてみてくれと言

い出しまして、私は娘に、しかし、鈴木様がいかに奇特な方でも腹の大きなお前との縁談なぞ叶わぬぞと言ひ聞かせたのですが、恥を忍んで聞いてみてくれの一点張りで聞く耳持たぬのです。」

俯いたお嬢さんの耳が赤く染まるのが見えました。

自分もようやくピンとききました。

もしそれが水谷の子なら、お嬢さんが自分に聞いてみてくれと言ひ出す筈はないので、自分の子だという確信があればこそ、恥を忍んで縁づきたいと言ひ出したに違いありません。

一夜の契りで子を授かったのは安穩な平安朝の藤原高藤とばかり思っていたのが、暗雲皇国を覆うこの世のわが身にも起きたのです。お嬢さんは俯いたまま、手を腹の前で拝むよう……、

水谷には悪いですが、因果をなした自分はお嬢さんとの縁談を受けました。」

『縁というのは不思議なものですね。』

『はい。それから一週間後にお嬢さんと祝言をあげ、夫婦暮らしを三日ほどして、自分は宇佐の基地に赴任いたしました。

離れ離れでも、同じ内地にいるのは幸運でした。子供が生まれた翌週には広島に帰り、自分の血を分けた小さい娘の顔を眺めて、抱きあげた時はもう嬉しくて嬉しくて、未来に光明が射すように感じました。

名前は真実子といたしました。」

『よかったですね。そのまま終戦になったんでしょうか。』

『いえいえ、昭和十九年、戦局は悪化の一途をたどり、臨時教官だった自分も養成したパイロットたちと共に、第二航空艦隊に編入されて、空母瑞鳳に乗り込み、サイパン沖に進出しました。

六月十九日早朝、わが策敵機より「空母を含む敵主力部隊見ゆ」と入電、自分は零式戦闘機に爆弾を積んだ爆装戦闘機に搭乗して瑞鳳より発進、総勢六十四機で敵機動部隊を目指しました。

海は太陽の光を受けて銀鱗のように輝き、空は青く、これが戦争でなければ、釣りでもしたいのどこかさ。

と、前方に蠅の群れのようなのが見えたかと思うと、これは敵空母から迎撃に飛び上がってきたヘルキャット戦闘機です。

敵機は射程に達しないうちから機関砲を撃ちはじめ、その橙色の光が線香花火のように美しく見えましたよ。

自分らは隊長機の突撃命令を待って、」

不意に奈緒美がラヂオの電源プラグを抜いてしまった。

「もう古い戦争の話なんていいわよ。」

奈緒美は準一の手をつかんで微笑んだ。

「うん、連続で聴いていたもんだから、つい熱中しちゃったよ。」

準一も奈緒美の手を握り返すと、抱き寄せた。

キスを交わしながら、胸の底からトットトツと信号を送ってくる。

突撃命令がきたな、準一はそう考えて苦笑しながら、奈緒美を抱き上げてベッドに運んで全裸にした。

滑るように、柔らかかで、熱く火照る肌、撫で、掴み、接吻する。

艶めいて、震え、焦らして、つかまえる。

抗い、反らし、受け入れ、蠢いて、迸る。

愛してる、愛してる、愛してる、準一は何度も繰り返しながら、奈緒美を伸吾にも誰にも触れさせず、永遠に独占したいと、激しく思った。

まどろむ間もなく、今まで口にしなかった言葉を奈緒美に放つ。

「結婚しようか？」

「え？」

「俺は奈緒美と結婚したい。」

「本気なの？」

奈緒美はそう聞いて目を輝かせた。

「冗談だと思う？」

他のシチュエーションなら「うん、冗談の塊」と笑う奈緒美がこの時は嬉しそうに無言ではにかんだ。

「本気で奈緒美と結婚したいんだよ。」

追い討ちをかけると、奈緒美はこくりとうなづいた。

「わかったわ、でも考えさせて。」

準一はうなづいて、第二次攻撃にとりかかった。

第4話

4 第四木曜日

その夜は残業のため、電車を乗り継いで部屋の最寄り駅に着いた時は十時をまわっていた。コンビニで週刊誌を立ち読みしていると伸吾からメールが入った。

（お疲れす。これから、ジュンち、寄ってもいい？）

（おお、歓迎だよ！但し、ビール持参のこと。）

（了解しますた）

携帯をしまつて、ビールのつまみを選んで、レジに持つてくと、後ろから缶ビールを半ダース持った伸吾が肩を叩いた。

「二人とも店内でしたね。」

「糸電話圏かよ。」

顔を見合わせて笑った。

肩を並べて歩きながら、伸吾は奈緒美からプロポーズのことは聞いてないのだろうかと思像を巡らせた。もつとも、伸吾も奈緒美も揃って、三年以上、準一に深い関係を感じさせなかったのだから、想像してもわからないのが本当のところだ。

準一は質問をぶつけてみる。

「なんでさ、この前、急に奈緒美のことを告白してくれたわけ？」

「うーん、俺もずっと前から言った方がいいとは思ってたんすよ。」

奈緒美もこそそするのが嫌なら、男同士で言うべきよ、私は、受け身なんだからねって言うし。」

「そう言われたらそうか。でも、俺、全然気付かなかったなあ。」

「すんません。」

「別にあやまらなくてもいいけどさ。」

準一はそう言いながら、今は自分がプロポーズのことを隠してる

後ろめたさを感じた。しかし、まだ返事をもらってないプロポーズのことを伸吾に話すのもおかしい話だ。

「で、質問の答えに戻ると、ほら、ラジオで老人の話を聞いたからですよ。漱石のころみたいなお話。あれで話そうてモティベーションが高まったんですよ。」

「うん。」

そう考えると、あの鈴木老人のおかげで、伸吾は俺に奈緒美との深い関係を告白し、俺は奈緒美を独占したくなってプロポーズしたわけだ。これは鈴木老人に感謝することになるかもしれないな。準一は自然と微笑が浮かぶのを感じた。

部屋の中で缶ビールを飲みながら、とりとめのない雑談を交わすうちに、ラヂオの時間を思い出したのは、なんと伸吾の方だ。

「あ、あの爺さんの話の時間じゃないのか？」

「おお、そうだ、出だしが三分くらい欠けたかな。」

準一はそう言いながら、ラヂオの電源プラグを入れた。

『その朝は早くに空襲警報がありました、空振りのようで、みんなほっとして普段通りに朝食を済ませました。』

芙美子の父は出勤し、芙美子は母と台所で後片付けをしておりました。

もうみつっになる娘は芙美子に近づいて言います。

「おかあさん、真実子、朝顔にお水あげるう。」

「そう、頼んだわ、偉いわね。」

芙美子は娘を誉めて、じょうろに水を、幼な子ですから、いくぶん少なめに汲んで渡してやります。

母が微笑で言葉を送ります。

「こぼさないように気をつけてね。」

「はい。」

娘はじょうろを大事そうに両手で抱えて、縁側から庭に降りまし

た。

地面から家の底に渡した針金に沿ってすすくと蔓を伸ばした朝顔の根元に水を注いでやります。蔓は五本ぐらいでしょうか、紫の花はすでに熱暑にそなえてしぼんだものもあり、ピンクの花は今はさかりといっぱいに開いていたりとさまざまです。

娘は花を数えはじめましたが、そこへ丸をふたつよつと並べた白い花がひらひら、ひらひら、どうやらそう見えたのはモンシロ蝶で、「おかあさん、来て、来て、蝶ちよだよ。」

なかに、蝶自体は珍しくありませんが、娘がはしゃぐ様子が愛らしくて、芙美子にはつこり、足早に縁側から降りようとします。

その時、私は冷たいいやな風が吹き抜けたのを感じて「中にお入り」と声をかけます。

しかし、芙美子と娘はモンシロ蝶に気をとられています。

私はもう一度大きな声で「いい子だから、中にお入り！」

娘は私の方を振り返りました。

「おかあさん、お父さんが呼んでるよ。」

娘の言葉に芙美子がアツと口を開いて何か言いかけました。

その瞬間、パアアツと太陽が何個も現れたような強烈な光。

芙美子はびっくりしながらも、咄嗟に娘をかばおうと覆うようにします。

ほんの数歩あるこうとして、今度は凄まじい突風が隣の屋根を、塀を、そして芙美子と真実子を吹き飛ばしました。

一瞬のうちに、家中のガラスが割れ、タンスが倒れ、壁が抜け、まるで一瞬のうちに竜巻が来たようでした。

台所の母はなんとか無事でしたが、妻は顔から胸と手足にかけて娘は頭から背中、手足にそれはひどい火傷で……。』

その時、部屋のチャイムが鳴らされた。

準一がドアを開けると、奈緒美がさっさと入ってしまった。

「伸吾が来てるんだ。」

準一は困った顔をしたが、奈緒美は気にならないようだった。

「あ、そうなの。お邪魔しまあーす。」

奈緒美は部屋の中に入ると、伸吾に挨拶した。

「ここで会うのはすごい久しぶりね」

「うん、ちよっとジュンと飲んでたんだ。」

奈緒美はすぐラヂオの放送に気付いて「ああ、この前の続きね」と言った。

『結局、娘の真実子は十日後に、芙美子は二ヶ月後に亡くなりました。』

『それは、なんとも痛ましいことですね。ご愁傷様でした。』

伸吾が奈緒美に「奥さんと娘さんが原爆で亡くなったんだよ。」と補足してやる。

「そう。可哀相だね。」と奈緒美。

『酷すぎますつ。』

何の罪もない、妻と子供が、あんな姿にされ、痛みの限りを味わわれて、救う術もなく、命を奪われるなどあつてはならんことです。早期終結の手段などという理由で正当化されてはならない、これは人間性に対する、生命の尊厳に対する重大な罪SINであります。

『鈴木老人が今までにない激しい口調で怒りをあらわにした。』

『原爆投下の罪はSINでありますから、刑罰によって裁いても足りません。』

原爆に加担した全ての人間が魂の眼でその罪の重さをはつきりと認めて悔い改めねば、被害者の無念が晴れることはないのです。』

『まったく仰る通りです。』

鈴木さん、今日が最終回なのですが、ご自分の人生を振り返って、何が一番心に残っていますか？。』

『それはたった今、申しました、芙美子と娘を原爆で惨い殺され方

をしたこと、それを守ってやれなかったことです。』

『やはりそうですか。想像を絶する出来事でしたね。』

しかし、逆に、嬉しかったことはありますか？どうでしょう？』

『娘が生まれた時も嬉しかったのですが、忘れてならないのは水谷に危ういところを救われた時です。』

あの時は、敵がまさに私の機を落としかかり、最期を確信しておりました。それを水谷が颯爽と救ってくれた。

いや、眩しかったです、水谷が神仏に見えましたね。』

『喜怒哀楽の怒りと喜びが片付きました。さて哀は何でしょう？』

『それは水谷の細君であつた芙美子に軍人の覚悟を笠にきて卑劣な形で関係を強要したことです。』

芙美子は私を赦し、結果的に娘も生まれ、芙美子と家庭の幸せを手に入れることができましたが、それはたまたまの結果です。

原爆とは違いますが、あれは私の重大な罪 SIN であります。』

『なるほど。それで最後に楽しみが残りました。これはなんでしょう？』

『振り返るといろんなことを学びました。』

水谷には万事を楽観する心と命を顧みず友を救う偉大な心を教えられました。

芙美子には私への赦しを通して、生命に対する無私の愛の深さを知り、次の生命を守り育てる女性の偉大さを教わりました。

また親からも同じように、愛の深さを教わりました。

そのおかげで、一見、実りのないように見えた私の人生も、掛け替えのない価値ある人生だったと言い切れます。

すべてがおおいなる生命の学びのためであつたとわかった今、すべての思い出をしつかりと噛みしめることができますのです。

これが人生というものの最大の楽しみではないでしょうか？』

『なるほど。素晴らしい言葉をいただきました。』

『ちよつとよろしいですか？』

『はい。』

『先週、聞き逃した方がいるので、肝心のところを繰り返させて下さい。』

『どうぞ。』

『昭和十九年、六月十九日の朝、自分は空母瑞鳳から二百キロ爆弾を積んだ戦闘爆撃機に乗り込んで出撃しました。』

やがて目標に近づくと、敵のヘルキャットの編隊が舞い上がってきました。

隊長機から「敵機を振り切り、目標を攻撃せよ」と突撃命令が出ます。

敵の機銃は、線香花火のように煌めき、それを見た自分は、縁日の境内を歩いていた記憶を蘇らせました。

メンコ、ビー玉、ハッカ飴、綿飴、飴細工、お面、輪投げ、金魚掬い、いやあ、これから戦闘だというのにおかしな映像ばかり浮かんでくるのです。

そんなことでは操縦はいい加減なのだろうといわれると、これが信じられないくらい巧みで、右に、左に、横すべり、急降下、反転上昇と、敵機の包囲をみるみるぐり抜けて、敵空母を視界に捉えました。

前方にいた僚機が無線で告げます。

「敵空母レキシントン級、補足す、安田少尉、突撃する！」

自分も遅れてはならじとばかり、

「目標レキシントン級空母、鈴木少尉、突撃する！」

そう無線で叫んだ時にはもう体当たりも覚悟です。

操縦桿をガツと握って、俯角四十度、スロットルは全開のまま、機体が空気の抵抗で激しく振動して、風切り音がギーンギーンと響きます。

敵空母と駆逐艦の機関砲と機銃から、物量にものをいわせた銃弾の帯が舞い上がってきます。

高度四百切ったところで、前方をゆく安田少尉機のさらに手前で、

敵の弾が炸裂し、安田少尉機があつという間に火を吹くのが見えま
した。

「こいつら、新型信管だ！」

自分は部隊に通報するつもりで叫び、落ちてゆく安田少尉に目礼
を送りました。

しかし、ここまできたら、運を天に任せて降下を続けるのみです。
敵の銃弾がバツバツと至近距離で炸裂し、機体に傷がつくのがわ
かります。

高度二百でついに主翼の前で炸裂した弾に、燃料タンクが引火し
てしまいました。あつという間に紅蓮の炎が操縦席のまわりを包み、
足元から火がまわります。

火傷のため痛いはずなのですが、痛いというより熱い感覚がじく
じくと上がってきます。

どうせ墜落するなら、敵空母の甲板に体当たりしたかったのです
が、機首が下がってしまい、同時に、操縦桿も効かなくなってきました。

自分は敵空母の甲板を横目で睨み、どんどん近づく海面を見つめ
ました。

火傷はどんどん広がり、自分は口の中で「熱う、熱う、熱う」と
繰り返しています。』

話を聞いてるうちに準一は、本当に火傷を負って熱いような気が
してきた。

『しかし、頭の内側には、妻芙美子や娘真実子、父、母、義父母、
兄、妹、水谷との思い出の場面が次々と浮かびます。よく死の直前
に記憶が走馬灯のように駆け巡ると聞いてましたが、まさにその通
りでした。

ふと計器の表示が目に入り高度１メートル、目を瞑った瞬間、意
識は肉体からサッと離れました。すると、海面に自分の飛行機の破
片と飛行服が散っているのが見えました。

しかし、これで終わっただんだから、仕方ないと思い、苦しさや未

練はあまり感じませんでした。それから目をまたたく瞬間に自分は
広島の家に戻っていました。

芙美子は母と縫い物をして、まだ小さい真実子は小さな黒板に
たずら書きのようなことをしております。

自分は「芙美子、真実子、お母さん」と声をかけてみましたが、
妻も母も気付きません。ただ真実子は私の気配を感じたらしく、ふ
と天井のあたりを見上げました。

なんとか自分の肉体の死んだことを知らせようと、自分は念を込
めて、仏壇の位牌を倒すことに成功しました。

すると真実子が「父さん、帰ってきた」と無邪気に言い、芙美子
は青ざめた顔で胸を押さえました。」

準一は伸吾と奈緒美と顔を見合わせてゾツとする。

「これ、ドラマだったんだね」

奈緒美がそうあってほしいと言うが、準一も伸吾も、鈴木老人の
次の言葉を待った。

『三週間後には戦死公報が届きました。自分ではできるだけ家にとど
まって何かあれば、家族を守ってやろうとしたのですが、原爆から
妻子を守ることはできなかったのです。』

『鈴木さん、ありがとうございます。』

これで聴いている方も経緯がかなりわかりになったと思います。
大野準一さんにあてた「わが人生」鈴木久仁彦さん編もまとめの
時がきました。」

「なんで俺の名前を知ってるんだ！」

準一は思わず叫ぶと、ラヂオのアナウンサーが冷静な声で言う。

『この放送は、霊界通信機により、放送を必要とする方にお送りし
ているのです。』

「れ、霊界」「霊界通信機?」「うそ！」

準一、伸吾、奈緒美は声をあげた。

『はい、かの発明王エジソンが霊界通信機に熱心に取り組んでいたのはご存知ですね。そして、この一見ラジオに見える装置こそは、その遺志を継いで完成された霊界との交信機なのです。』

「あり得ない」と伸吾。

『嘘かまことかは、この霊界通信機の裏パネルを開けてみれば簡単にわかることです。外見こそ、悪意の攻撃から守るため、ラヂオに見せかけていますが、この内部に通常のラヂオの回路はありません。』

準一は疑いながらも、ラヂオを横方向にまわして裏面を手前にした。

裏パネルのねじを急いでドライバーで外し、おそろおそろパネルを外すと、そこには高さ8センチほどの正立方体の金属枠と、その内側に爪で固定された水晶球があった。

水晶球の中には小さくかすかな紫の光が渦をまいているのが見える。

そして金属枠から伸びた糸は、スピーカーとみられていた裏側は丸い和紙につながっていた。しかも電源コードは内側に入ったとたん途切れて、電源の意味をなしてなかった。

『いかがでしょう、霊界通信機だということわかっていただけたでしょうか。』

もっとも、最近のプリント基盤技術ならそのスピーカーの和紙の厚さでラジオは作れると疑うこともできますが、聴いてこられた方は納得できるはずです。

大事なことは、我々は、魂こそが生命の実質であり、永遠であることです。

そして我々の肉体による人生は、おおいなる秩序のために、個々の魂がささやかであれ進歩を遂げるためにあるのです。

そうですね、鈴木さん？』

『はい、ただ今の時代は、前世を戦争という形で唐突に断ち切られて転生された方が多いため、明るい未来を思い描くのが非常に不得手な方が多いのです。』

しかし、恐れることはありません。お聴きの皆さんは自分の明るい未来を信じて生きて下さい。』

『それでは四週間の間、ご静聴ありがとうございました。』

この通信機は買われた店の棚にまたそつと戻しておいてください。不審に思われることなく、放送を必要とする新たな方が買われるでしょう。』

「ちよつと、待って、なんで僕にこの放送を聞かせたんです？」

準一は思わず聞いていた。

『それは無意識では既にご存知だと思いますが、明確化するために鈴木さんの口からお答えしていただきましょうか。』

『はい、わかりました。』

大野準一さん、あなたは私の生まれ変わりです。』

「そんな！」

準一は言い返してみたものの、本当に否定することはできないと感じた。

『そして、奈緒美さん、あなたは芙美子さんの生まれ変わりです。』

「えっ！」

『そして伸吾さん、あなたは水谷さんの生まれ変わりです。』

「まさか！」

鈴木老人が経験した三角関係が、そのまま現代に転生してきたというのだ。

普通ならとうてい信じられないことだが、霊界通信機の放送には真実の説得力が備わってるのか、三人は誰も反論できなかった。

『あなたたちは自分の前世を知ったわけですが、だからといって、理性でそれに限定されたり、逆に前世の貸し借りを考える必要はありません。自分の魂の願うまま、誰にも左右されず決断して生きれ』

ばいいのです。

私にはわかります。

あなたがたは、これから個々がどんな選択をしようと、私の時代でもそうあったように、いつまでもいつまでも仲の良い三人のままです。それこそが本当の愛だからです。

それではさようなら。』

ラヂオ、いや、霊界通信機は、そこでピタリと放送を止めた。

三人は言葉も出せずに、顔を見合わせた。

信じてもらえないかもしれないけど、俺は、偶然、手に入れたラヂオで自分の前世を知ったんだ。

空を飛んでいた、パイロットだよ。

すごいだろ。

道理で鳥のように空を飛びたいわけだよ。

さっき、奈緒美から『やっぱり今回は伸吾と一緒に歩いてみたい』って返事が来た。

それで俺は高速道路に繰り出してみたんだ。

だけど、俺は振られた悔しさなんて全然感じていない。

むしろ幸福感に包まれている。

奈緒美も、伸吾も、前世ひっくるめていい奴なんだから、仕方ないよな。

不意に見知らぬライダーが並びかけてきた。

黒いつなぎの胸が膨らんでるそいつは、俺の顔をちょっと覗きこんで不敵な笑み。

赤い唇の残像残して、スピード上げて飛んでいきやがる。

俺も笑いながらスロツトル全開、後を追いかけた。
《 完 》

第4話（後書き）

読みづらい点あったかと思いますが、おつきあいいただきまして、
ありがとうございます。

感想、批評等ありましたら、いただけると嬉しいです。

ブログにもお越しいただけると涙ちよぎれで喜びます。ブログの欠
点である日付順はないのでPCからなら読みやすいかと思っています。

銀河系一朗 小説、物語の部屋

<http://ginggak.blogspot117.fc2.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8043c/>

トライアングル

2010年10月8日14時18分発行